

はえぬきど真ん中

映画「ひまわり」が教えてくれたこと

真 夏の太陽をあび、まっすぐ空に向かって咲くひまわりは健康的な美しさであるが、私はいつも寂しさを感じていた。それは高校生時代、映画館で観たイタリア映画『ひまわり』のインパクトがあまりにも大きく、今もスクリーン一面に映し出されたひまわり畑が目に焼き付いている。

ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニが戦争によって引き裂かれた夫婦を演じた映画で、戦争から帰らぬ夫を捜しに行ったソ連（撮影地はウクライナ）で多くの兵士が眠るひまわり畑での捜索シーン、記憶をなくした夫はロシア女性と既に結婚していることを知り、一人汽車に乗り帰国する車窓に映し出されたひまわり畑のシーンは、主人公の悲しみを象徴する風景だった。ヘンリーマンシーニの哀愁あふれる音楽は、さらに悲しみを深めた。

日本での映画上映は1970年9月。ベトナム戦争真っ最中で、「戦争を知らない子どもたち」の歌が流行り、「戦争が終わって僕はうまれた…、平和のうたを口ずさみながら…」と、気軽に歌っていた私にとって、戦争は遠い存在だった。

それが、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、連日



悲惨な状況を見聞きすると、あの『ひまわり』が目につかんできた。ウクライナの婦人が、侵攻してきたロシア兵に抗議しながら、ひまわりの種を渡し「あなたたちがここで死んだら、ひまわりが咲きますよ」と言ったそうだ。死者の眠る地に咲いたひまわりは、ウクライナの人々の心に今も生きている。

茅誠司初代代表（当時は東京大学総長）は、安保闘争の学生運動メンバーと話し合いを続けた中で、「イデオロギーの対立は憎しみを助長するだけ。お互いを思いやる『小さな親切』が必要だ」と「小さな親切」運動を始めた。争いが絶えない世界を変えることはできないが、一人ひとりの小さな思いやりは人を変え、社会を変える力となると説いた。

私もその一人として、今、自分にできる親切を実行できる人間でありたい。

文：山橋由貴子【やまはしゆきこ】（公社）「小さな親切」運動本部専務理事兼事務局長 イラスト：安彦麻理絵【あびこまりえ】

「心のワクチン」運動

まもなく“思いやりの感染症対策”冊子発行!!

新型コロナウイルスのまん延から3年、様々な対策が進み、定着したことで、日本は従来の社会活動を取り戻しはじめています。そしてそんな今だからこそ、これから新たな感染症が現れても、過剰におびえ、ギスギスした社会に陥ることがないように、3年間の学びを冷静に見直し、しっかりと身に付けていただきたいと私たちは考えました。

そこで現在「心のワクチン」運動の一環として、思いやりの感染症対策をまとめた冊子を作成しています。

「知識パート」では、どのような感染症にも対応できる感染対策の正しい知識をわかりやすく解説。また「思いやりパート」では、コロナ禍の中「小さな親

切」作文コンクール、はがきキャンペーンに寄せられた作品から、子どもから大人まで、多くの方々がどのように不安な気持ち、差別や偏見を乗り越えてきたのか、思いやりに助けられたのかを振り返り、異常な事態における心のあり方を考えています。

11月下旬発行予定。情報はホームページなどに掲載いたします。無料提供（送料別途）できますので、ぜひ学校、企業、家庭でご活用ください。

